

エンタイトルメントについて

神山 和好

茨城工業高等専門学校

1. 「世界は存在する」ことを信じる権限はわれわれにあるだろうか。そのような権限がわれわれにあることを示そうとした議論の中で最も簡単で、最も有名なものは、ムーアの論証 (Moore, 1939) である。それは次のように議論する。

M(1) 手が見える。

M(2) 手がある。

もし手があれば、世界もある。

よって

M(3) 世界は存在する。

M(1)「手が見える」は M(2)「手がある」の証拠として置かれている。M(2)の 2 つの前提から M(3)を導くこの論証は「前件肯定」という妥当な推論形式に従っている。論理的にはまったく問題はない。気になるとすれば、M(2)の中の「もし手があれば、世界もある」だろうか。これは対偶をとるとわかりやすい。次のようになる。「もし世界がなければ、手もない」。これは受け入れざるをえないだろう。

2. しかし、この論証については「成功していない」という意見が大勢を占めてきた。クリスピン・ライト (Wright, 2004) もその一人である。彼は次のように議論する。

同じ型の次の議論を考える。

E(1) ジョーンズはたったいま用紙に 'X' と書き入れた。

E(2) ジョーンズはたったいま投票した。

もしジョーンズがたったいま投票したのならば、選挙が行われているということだ。

ゆえに

E(3) 選挙が行われている。

E(1)は E(2)を支持する証拠となるだろうか。たとえば選挙訓練 (消防訓練のような) が頻繁に行われている地域では、E(1)は E(2)の証拠にはならない。目撃したのは投票ではなく選挙訓練であったのかもしれない。次のように言いたくなる: E(3)を受け入れる根拠をあらかじめ持っている場合に限り, E(1)は E(2)を支持しうる。

ムーアの論証についても同じことが言える。ムーアが M(3)「世界は存在する」を受け入れる証拠をあらかじめ持っている場合に限り, M(1)は M(2)を支持しうる。つまり、M(1)が M(2)のための証拠となるのは (そして M(3)のための証拠となるた

めには、M(3)を受け入れる証拠がある場合だけである。しかし、M(3)に保証を与えるのが論証の目的だから、論証は論点先取である。つまり、これから示すべき事柄を事前に仮定している。

このタイプの論証が有効であるためには、E(3)や M(3)に対し、E(1)や M(1)とは独立した事前の支持が必要である。E(3)にはそのような支持は可能だろうが（たとえば、その日の朝刊に、この地方のどこかの町で今日選挙が行われると書いてあった、という事実の提示）、M(3)についてはそのような支持の見込みはまったくない。

3. 話を整理してみよう。ムーアの論証は次の構造をもっている：M(1)「手が見える」という事実が M(2)「手がある」を支持する証拠となる。そして、その証拠は「手がある」と「もし手があれば、世界も存在する」とから論理的演繹により、M(3)「世界は存在する」という結論にそっくりそのまま転移する。ライトが指摘するのは、M(1)が M(2)を支持する証拠となったとしても、その証拠は M(2)の論理的帰結である M(3)に転移しない、つまり「転移の失敗」(*transmission failure*)がここで起きている、ということである。証拠の概念は論理的演繹に関して必ずしも閉じていない。

4. この議論の帰結：われわれの証拠の概念全体は根拠のない前提に基礎をおいている。ここで、根拠のない前提とは「世界は存在する」である。根拠のない前提に基礎を置く証拠は有効ではない、とすれば、これは、「われわれの証拠の概念全体は有効ではない」という懐疑論である。

5. この「証拠懐疑論」に対しどのような応答があるだろうか。ライト自身の対応は次である。

「世界は存在する」という命題 Hの正しさを前提としない限り「手がある」という命題 Eは「証拠による正当化」(*evidential justification*)をもたない(証拠により正当化されない)、ところで Hの正しさは保証されない、よって Eは証拠による正当化をもたない。よって、Hもそれに支えられるすべての Eも保証されない、と懐疑論は議論する。しかし、この議論は正しくない。Hやその論理的帰結すべてが証拠による正当化をもたない、という前提と、それらはいかなる保証(*warrant*)をもたない、という結論との間には論理的なギャップがある。証拠による正当化(*evidential justification*)をもたない保証を考えれば、すべては保証をもたない、という結論にはならない。通常、信念の形成のためには証拠という「料金」を払う必要がある。しかし、「世界は存在する」や「自然は斉一的である」といった礎石命題(*cornerstones*)については、無料の(信じる)権限というものがあるはずだ。たとえば、「世界は存在する」という命題は、世界の構造を探ろうという研究活動が有意義であるための前提である。それを信じる権限がある。

ライトはこのように考え、いくつかの種類の権限(エンタイトルメント)を定義している。そして、このような方向で諸種の懐疑論に答えていこうというアプローチを「統一戦略」(*unified strategy*)と呼んでいる。

6. 著者は、デイビス(Davis, 2004)とともに、ライトのプログラムの有効性に疑問をもっている。発表では、それに代わるプログラムを提案、擁護したい。

